

* 小林論文 質疑応答

インフレ政策に関する北坂のコメントに対し、小林は、現バージョンは実物モデルであり名目的な貨幣的現象を議論することは確かに困難な設定となっている。短期資産の価値に対するショックは、バブルの崩壊など株価の下落をイメージしている。またデフレについては、マクロショックに対する誤った政策対応の結果、貸出しの過剰回収が起り、それがこのモデルのデフレと解釈できると返答した。

均衡の解釈について、青木が、ここでの社会的厚生を最大化による解は市場均衡解と一致しているのか、政府の行動を所与とした銀行の最大化行動といったナッシュ均衡を解いているのかと質問したのに対し、ここでは先行研究に従い、銀行が社会計画者として社会的厚生を最大化するモデルを解いているとの返答があった。さらに青木は、複数均衡であれば預金保険は取り付けの発生する均衡を排除する機能を持つが、ここでは単一均衡であり、そのような場合預金保険にはどういった意味があるのか、また複数均衡のモデルにして、そこで預金保険と資本注入とを比較すれば面白いのではとコメントした。入谷からは、モデルをより動学化できないかとの指摘があった。

ショックの性格について、渡辺は、集計されたマクロ・ショックでなく idiosyncratic であっても公的資金投入は必要かと質問した。これに対し、個別ショックの場合には預金保険による対応が最適となると返答した。さらに渡辺は、資本増強について、ここでは強制的な公的資本注入だけを考えているが、銀行が自主的に行う増資も考えられると指摘した。これに対しては、銀行の自主的な増資は資産の裏付けが必要なため、モデルが想定するマクロ・ショックのもとでは政府による資本増強しか出来ないとの回答があった。

地主・宮尾は、このモデルでは premature な貸出し回収が非効率の源泉であり、それは現実の「貸しはがし」に対応しているが、日本の現実にとっては「追い貸し」、つまり非効率な貸出しの温存も大きな問題なのではないかとコメントした。

藤木は、短期資産のショックに関連して、株価下落が通貨危機と連動したアジア危機のようなケースでは銀行 insolvency がイメージしやすいとコメントした。またここでの効用関数の想定(危険回避度 > 1)の妥当性についても言及する必要があると指摘した。

中尾は、現実の政策対応に関連して、資産の劣化に直面した場合に going concern として再生させるのかそれとも清算かの線引きが実際には最も難しい、また公的資金の投入は、預金者・家計から銀行への資金移転であり、リセットすることで本当に全て解決するのが問題となると発言した。

以上